

水源地の村づくりを考える

川上村農業委員会

1. 市町村の農業の概要

川上村の面積は約270km²。その約96%が山林で、日本三大人工美林の一つに数えられる吉野杉の発祥地です。吉野杉を育てる吉野林業の歴史は室町時代にさかのぼり、この川上村で始まりました。そのような歴史的背景もあり、本村では林業が中心で、農業は副業的に行われてきたように思われます。

平成26年10月1日現在、861世帯（1,602人）のうち42世帯（77人）が農業に携わっています。全国的な問題ではありますが、過疎や少子高齢化が進み、高齢化率55.9%となり、奈良県内でも最も高齢化率が高く、農業者数も年々減少傾向であるとともに、農地の維持管理も困難になってきています。

このような中、本村では「水源地の村づくり」をキャッチフレーズに取り組みを進めています。「私たち川上は、かけがえのない水が作られる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します。」などの5項目からなる『川上宣言』を発信しました。これは、川上村が吉野川の源流であることから、自ら源流としての役割を果たしていこうという覚悟のもと発信したもので、宣言文のひとつひとつを具現化していくことで、水源地の村づくりを推進しています。

2. 農業委員会の取り組み

川上村では自家栽培・自家消費の兼業農家が主となっており、人口減少とともに遊休農地の増加が課題となっています。このため、農業委員会に「遊休農地対策委員会」を設置し、農地活用方法を模索しています。これまで、若松・榎・シキミ・榊等の植栽や、こんにゃく芋、各種葉草の栽培を行い、遊休農地の活用と収益をめざした取り組みも積極的に行ってきました。しかし、さらなる少子高齢化の進行により、栽培活動が困難になっています。

①具体的な取り組み内容

平成12年から、特産品販売を主とした「ふるさと市場」を毎週土、日曜日、祝日（3月末～11月末）に開催しています。小規模な「市」ではありますが、固定客の定着とともに、着実に売り上げを伸ばしています。

また、農業委員会が助言や仲介を行い、本年7月からは、地域おこし協力隊員が野菜販売を行う朝市「やまいき市」を毎週土曜日に始めました。高齢者が育てた余剰野菜を集荷し、村民を主な対象として販売を行っています。販売額の2割を販売手数料としていますが、8割は出荷者へ還元し、出荷意欲の向上につなげています。この市の認知が徐々に広まるにつれ、野菜の出荷量や種類も増加しています。そして、グランフロント大阪など近隣府県に出店販売するなど、その活動は発展してきています。

②取り組みにあたっての課題

「やまいき市」は遊休農地化を抑え、高齢者への生きがい提供とともに地域の医療や福祉などの面でも結果的に貢献できる活動と評価しています。

しかし、地域おこし協力隊の任期は3年間であり、隊員卒業後も継続実施されるかどうかは課題と考えられ、農業委員会では村と連携して、彼らの活動のサポートを行っていきたいと考えています。

また、余剰野菜を村内で流通させることを第一目的として取り組んでいますが、事業の継続性を考えると、野菜の出荷量とともに販売額の増加に取り組んでいかなければなりません。

③課題への対応方策

余剰野菜だけでは安定供給が困難と考えられるため、現在は隊員自身も村内で約10aの畑を借り受け、人気野菜である白菜の栽培を始めました。栽培にあたっては、農業委員や地元高齢者の指導を仰ぐなど、交流を深めつつ取り組んでいます。

また、農林水産省が定めた「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に従って生産し、特別栽培農産物の認定取得などを目指しており、付加価値をつける方法を検討しています。

これらの取り組みにより売上額を増加させることで、隊員卒業後の定住定着を考えるための一つの収入となればと期待しています。



源流野菜：川上村が吉野川の源流の村であることから、川上村で栽培されている野菜を「源流野菜」と名付けました。